

〔研究ノート〕 安政5年コレラ流行とおどけ長唄

『しに行^{ゆき} 三日^{みっか}轉^{ころり}愛^{あい}哀^{あい}死^い々^し』

鈴木 則 子

はじめに～幕末の「死の舞踏」

ここに掲げたのは安政5年（1858）、コレラが流行した年に刊行された『しに行 三日轉愛哀死々』の表紙絵である。髑髏を両手に踊る女性の姿を見た時、私はすぐさまヨーロッパ中世のペスト禍によって生まれたとされる絵画「死の舞踏」を連想した。「メメント・モリmemento mori(死を想え)」という有名なフレーズを基調とする中世末期の終末観に彩られた、一連の骸骨の絵画である。彼女の両手にある髑髏は、幕末日本でもコレラの大量死を経験したことで、人々が新たな死生観を持つようになったことを示しているのだろうか。

ところが丁をめくると、そこに展開していたのは疫病下の江戸市中の生活を面白おかしく描く、おどけ長唄の世界であった。ヨーロッパ中世の深刻な終末観とはまったく様相を異にする。当初の予想を見事に裏切られたことでかえって興味が深まり、本書のなかのコレラをめぐる江戸庶民の風俗を、江戸町触などの同時代の史料と照合しながら読み進めていった。もちろん戯作史料はあくまでも二次史料であって、ここから歴史的事実を導き出すのは限界がある。だが史実そのものよりも、そこから展開する様々な人間の営みにフォーカスをおく本書の記述を読んでいると、コレラの流行で変容していく日常生活を市井の人々がいかに認識していたか確認するには、戯作史料は有効ではないかと思いついた。そこで以下、おどけ長唄の翻刻と分析を通じて、江戸庶民がコレラ流行をどのように経験したのかを検討してみたい。

一、アジア・コレラの世界的流行

本論に入る前に、江戸時代のコレラ流行史の概略を述べる。コレラとは、コレラ菌で汚染された水や食物を摂取することによって感染する急性感染症で、下痢と脱水症状を主症状とする。コ



図1 『しに行 三日轉愛哀死々』表紙
(立命館大学ARC所蔵 hayBK02-0169)

レラには現在までに大別して3種類が確認されているが、本稿で取り上げるのはアジア・コレラと呼ばれる極めて致死率の高いコレラである。そもそもインドの風土病であったものが、19世紀初め、欧米列強の植民地への侵略が進む中でグローバル化し、世界各地で流行をみせた。

アジア・コレラの世界的流行は、日本の江戸時代に相当する時期に計3回あった。その第1次世界流行は1817年から1826年で、アジア・アフリカで流行し、日本へも文政5年（1822）夏に上陸、文政6年夏も再燃する。ただし流行地域は西日本中心で、江戸には到達しなかった。第2次世界流行は1829年から1837年だが、この時は欧米へも波及するものの、日本には入ってきていない。

そして第3次世界流行が1840年から60年で、この時に日本へ流入したのが本稿で取り上げる安政5年（1858）のコレラである。発端は同年5月にコレラに感染した乗組員を乗せ、アメリカ船ミシシッピ号が長崎に入港したことであった。流行は長崎から海路と陸路を介して東は江戸、陸奥まで拡散し、多数の犠牲者を出して9月に終息した。この時のコレラは翌安政6年（1859）夏に再燃、地域によっては万延元年（1860）も再々燃し、さらに文久2年（1862）春から夏の麻疹流行後の再々々燃では、麻疹の犠牲者を併せると安政5年流行時以上の死者が出ている¹。

二、『しに行 三日轉愛哀死々』とは

本書は表紙を入れて8丁の薄い版本で、国会図書館、立命館大学、町田市立図書館の三か所で所蔵が確認できた。立命館大学は本書の分類を「薄物正本見立戯作」とする。本論では内容がわかりやすいように便宜上「おどけ長唄」と表現したが、国文学研究上の分類はこの「薄物正本見立戯作」とするのが正確である。「薄物正本」とは、新作舞踊上演の際に芝居茶屋や絵草紙屋から頒布された、役者・作者・演奏者などの上演情報と音曲の詞章を載せた小冊子である²。

作者は三弦の「志柰屋徳三郎」に仮託されているが、実際の作者は不明である。刊行年の記載もないが、末尾に掲載される江戸のコレラ死者数情報が9月15日までの統計であること、時事的内容を扱う以上、成稿後迅速に出版されただろうことから、安政5年のコレラ流行終息直後の9月末と想定される。江戸での出版であろうが、版元も不明である。

題名『しに行 三日轉愛哀死々』の「しに行」は「道行」の洒落で、死出の旅を意味する。「三日轉愛哀死々」は安政5年のコレラ流行時のコレラの俗称「三日コロリ」と、人気長唄「相生獅子」のタイトルのもじりを組み合わせている。コレラを「三日コロリ」と呼んだのは、たった三日で死んでしまうという、その急性症状にゆえんする。

長唄「相生獅子」が選ばれたのは、「獅子」と「死」の語呂合わせであるとともに、安政5年のコレラ流行時、疫病退散のために祭礼用の獅子頭をかついで各町内を渡すことが行われたので、それにちなんでのことかもしれない。また、数多ある獅子物から「相生獅子」つまり「相生」をタイトルに冠する曲が選ばれたのは、『しに行 三日轉愛哀死々』が道行をモチーフとする曲だからだろう。

長唄「相生獅子」は、享保19年（1734）に江戸中村座において初演された曲で、現存する石橋物のうち最古の曲である。七世杵屋喜三郎作曲、作詞者不明、本名題は「風流相生獅子」である³。初演時の役者は歴史的な名女形の瀬川菊之丞、長唄は吉住小三郎、三弦は七代目杵屋喜三郎であった⁴。

三、翻刻と考察

全冊を①から⑨までに分割して翻刻と分析を行うこととする。

①表紙（図1）

表紙については、「相生獅子」の薄物正本と比較しながら検討を加える。「相生獅子」の薄物正本は多くの版が伝来するが、ここでは描かれた役者の被り物の類似性が高い、富士屋小十郎版と比較対象として掲げる（図2）。

○左側「しに行 ^{みつかころりあいへしへ} 三日轉愛哀死々 上下 正進所 寺町 八百屋物蔵飯」

題名が卒塔婆に書かれ、その下に版元情報が載る。「正進所」は精進所の意で、所在地は寺町、版元の名が「八百屋物」であるのは八百屋が精進物の野菜を扱うからである。「相生獅子」の版元記載は右側最下段で、「ふき屋町かし通 富士屋小十郎」とある。

○中央

踊る女性は死者が着る白装束の振り袖姿、笠には牡丹の花の代わりに仏具の花瓶に挿した^{しきみ}櫛、両手には獅子頭の代わりに髑髏を持つ。女性の周囲には蝶の代わりに蓮の花弁が舞い散り、頭上の円の中は通常は踊る役者の紋が入るが、ここではコレラ除けの呪いとして門戸につるすことがはやった八つ手が描かれる。

○右側 上段「鼻唄 こし屋高蔵・穴掘溜太郎・焼場粉無太郎・医寺坊三」

中段「三ザン 跡野妻子・折レ口五九郎・肴屋女三、作者 志祢屋徳三郎」

下段「はら太鼓 門前子蔵、日々ニ笛 無駄奈祈祷太、つゝみ 強飯万十、ふり付 屋美月間内」

上段の「鼻歌」は本来「長唄」。コレラで儲かって鼻歌まじりの商売をあげる。葬儀用の輿屋、土葬の穴掘り人夫、火葬の焼場、そして医者と寺の坊主である。中段の「三ザン」は本来は「三弦」。散々な目にあった人々で、残された妻子、折れ口（葬式の意）ご苦労、コレラで商売があったりの肴屋と「女三」。ほくさんはおほくさん、御仏供様の意で仏前に供える飯のこと。作者に仮託された志祢屋徳三郎は長唄三味線の名跡、杵屋六三郎のもじりか。当時は六世六三郎の時代である。下段はたらふく食べて腹鼓を打つ門前の子蔵、日々ニ笛（増え）る無駄な祈祷、葬儀用のこわ飯と葬式饅頭の鼓（包）が続く。「ふり付」は「病みつく」の洒落で、「屋美月間内」は「病みつくまない」と読ませるのだろう。

②見返し（図3）

表紙裏の見返しは、安政5年コレラ流行時に江戸の町で流行った様々な疫病除けの品である。いずれも門口に貼ったり吊り下げたり、または神棚などに祀った。「日々ニ笛 無駄奈祈祷太」



図2『相生獅子』富士屋小十郎版 表紙
(国立音楽大学図書館所蔵 竹内文庫07-0005)

○右列

- ### ○中央列

- ・「いかでかはみもすそ川の流れくむ人にあたるなえきれいの神」 疫癘除けのまじない唄。みもすそ川（御裳濯川）とは伊勢の五十鈴川の別名。

- ・「**正一位鷗^{かもめ}稻荷大明神守護攸向柳原能勢氏**」 能勢稻荷の守り札。能勢稻荷は神田佐久間町の旗本能勢熊之助屋敷内にあった。毎年初午の大祭のみ一般の参詣を許し、大祭日に「黒札」と呼ばれるこのような黒い護符を販売した。本来は火伏の神だが、狐憑きに効果があると信じられた。

○左列

- ・「蘇民将来子孫家」 疫病除けの守護神として著名な蘇民将来の護符。
- ・「祈禱寶牘」「寶牘」は祈祷札の意。詳細は未詳。
- ・「」 未詳。
- ・「三峯山（狼の絵）」 現埼玉県秩父市の三峰山の御札。三峰山は江戸時代には聖護院派天台修験の関東総本山で、狼を眷属とした。江戸時代の三峰信仰は火防・盗賊除け等の御利益をもって関東・甲信地方に浸透したが、特に安政のコレラ流行時には、狼が狐の天敵であることから狐憑き退散にご利益があると評判になり、多くの参詣者を集めた。
- ・「**ニク**の束」 門口に掛けて疫病除けとした。また門口でいぶすこともした。
- ・「佐原十左衛門」 人物の由来は未詳。

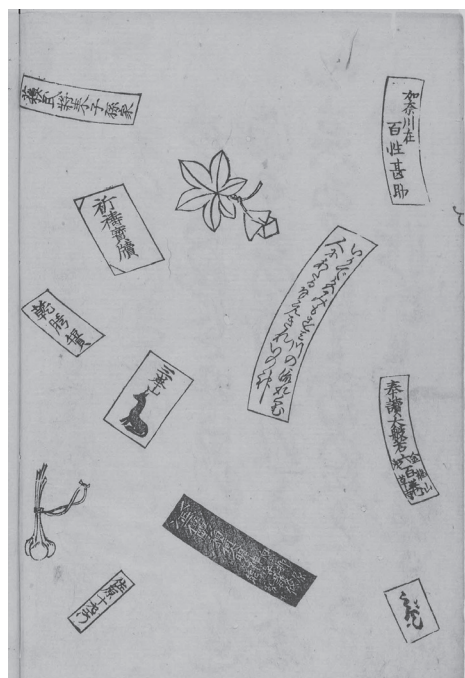


図3『しに行 三日轉愛哀死々』見返し
(立命館大学ARC所蔵 hayBK02-0169)

③玉川上水の毒の噂と水屋の不況（1丁表～2丁裏）

「三日ころり愛哀死々 志祢屋徳三郎述

芋の葉におく露ならで、はかなさ八、あしたの風にさそわれて、ころりと消る玉の緒の、きれて
あ世へ旅立八、あわれ無常のゆめごころ。ゆめかうつつ、かわく方も泣より外のすべもなや。
入始八それとしら布を、さらす武さしの玉川の水に流せし毒ゆへと、一人が言バいえばえにそれ
から夫へつたわりて、水道を吞バ死るぞと、身振ひなして茶ものます。
入あわれや茲に水屋てふ唱ふる物の今日より八、何を活葉に世渡りの煙り立んととつおいつ想ひ
沈バ秋雨に濡る袖さへ袂さへ、泣の泪の玉川や神田上水汲とて、誰か買ふべき。いざやいざ同
じ因の水なれば、ちぎりも深き堀抜の井戸に命をつながばや。」

ここから本文となる。道行は道行でも、死出の旅の始まりである。「芋の葉におく露」とは、七夕の時に芋の葉の露を集めて願い事を書く習慣に拠るが、ここでは命がはかないことのたとえである「草葉の露」を連想させ、あ世への旅立ちへつなげていく。突然の死で流す涙は、水がらみで「玉川の水」について語る導入となる。

「玉川の水」すなわち玉川上水に毒が混入されて、上水から引く水道の水を飲めば死ぬ、と風評が広がった。江戸には玉川上水と神田上水という二大上水道があって江戸市中に飲料水を提供していたが、断水することが多く、また堀抜の井戸も不十分だった。そのために水屋が神田・玉川上水のはけ口から水を汲んできて販売していた。ところが玉川上水の毒の噂のせいで、水屋の水が売れなくなる。水屋は何で生計を立てようかと思ひ悩んで泣きの涙である。人々は代わりに井戸水で命をつなごうとした。「ちぎりも深き堀抜の井戸」という詞章は、「堀抜井戸」が「深い仲」をしゃれている言葉として用いられていたことによる。

安政のコレラ流行時の状況について『虎狼利雑話』⁷は、ちょうどこの頃、甲斐国小室の妙法寺（日蓮宗）が江戸へ出開帳に来て、毒消し効果で有名な「消毒の符」を販売し、人々はこの護符に殺到したと記す⁸。このほか、上水を引く井戸に水天宮神符を立てる、神符を投じる、しめ縄を張るといったまじないや、上水井戸から汲んだ水を砂漉して利用することも行われたと記す。

④海の毒と魚屋の不況（2丁裏～3丁表）

「入聞八魚にも毒がある。海にも毒をいれたるや。

入初夜の鐘をバつくまで八酒をすごしていた物が、今朝八ころりとねにかえる、花の姿も散りて
行。諸行無常の風まかせ。鰯の毒と言つとふ。」

同時に海にも毒が撒かれたという噂が流れた。夜8時頃の初夜の鐘が鳴る頃まで一緒に酒を呑んでいたような元気な者でも、はかなくも翌朝ころりと死んでしまう。鰯の毒のせいだともっぱらの評判である。

前掲『虎狼利雑話』は、異国船が近海に停泊中、海中に毒を流したという噂を伝える。ちょうど安政5年6月19日に江戸湾小柴沖のアメリカ艦上で日米修好通商条約が締結され、これを皮切りに9月初めまでの間にオランダ、ロシア、イギリス、フランスと次々に同様の条約を結んだ。いわゆる安政五か国条約である。この頃江戸では異国人が市中で買い物したり寺社参詣をする姿が

みられるようになり、異国人への販売制限品目などに関する町触が出るようになる⁹。毒投入の噂も、異国人の存在が身近になったからだろう。

上野国七日市（現群馬県富岡市）の藩医で戯作者でもあった畑銀鶏（1790-1870）は、ちょうどコレラ流行中に江戸亀戸に滞在中で、その体験と見聞をまとめた『疫癘雑話 街迺夢』を出版した¹⁰。銀鶏によれば、鰯を食べると即死するという話は8月初めには江戸一円で評判となった。鰯売りが鰯を廃棄し、また上総から来た鰯船も積み戻ったと記録している。知識人である銀鶏は「水道へ毒を流して江戸中の人を皆殺しにする」、「アメリカが悪き狐を残しおきて人につけ、日本人を悩ませる」といった噂を「浮説」として否定している。だが『しに行 三日轉愛哀死々』の次の歌詞にあるように、江戸の町では狐憑きがコレラと結び付けられて流行する。

⑤狐憑きの流行（3丁表～4丁表）

「日々^ひに死人^{しにん}の数^{かず}ぞえ、ことあたらしや人々の昨日^{きのふ}の花^{はな}ハけふの夢^{ゆめ}、今^{いま}ハ我身^{わがみ}か翌日^{あす}ハ亦^{また}、
妻子^{つまこ}の死^しることやぞと、氣^きをもみち牽^がしら張^{はり}の挑^{でう}灯^{ちん}てらす死^し出^での山^{やま}。
へかゝる折^{おり}しを時^{とき}得^え兒^が、すこしぼんとしたぼん助^{すけ}に、お先^{さき}狐^{きつね}のと^とりついで、口^{くち}に任^{まか}せた出^で放^{ほう}題^{だい}。
これハ恠^{あや}しと加^か持^じ祈^き禱^{とう}、せめ立^たて落^{おち}しぞと、狐^{きつね}の噂^{うわさ}に驚^{おどろ}きて家^{いえ}並^{なみ}毎^{ごと}の軒^{のき}の端^はハ、ハツ手^や・に
んにく・寄^よ字^{せじ}の守^{まも}り、みもすそ川^{がわ}や黒^{くろ}札^{ふだ}に狐^{きつね}ハ恐^{おそ}れをなすととも、乗^{のり}越^こえて来^きる疫^{やく}病^{びょう}ハ、ほんに由^ゆ
断^{だん}もなら坂^{さか}や。この手^て柏^{かしわ}の裏^{うら}表^{おもて}、返^{かへ}す間^まもなくしするとハ、頓^{とん}死^しとん死^しじやないかいな。」

日々死者の数が増加していくなか、人々は今日は我が身か、明日はわが妻子かと死の恐怖にさいなやまれている。白張りの提灯とは葬礼用の提灯である。

流行中の8月における江戸町方の一曰ごとの死者数は、後日、町奉行所から発表されている¹¹。それによると、8月1日は112人であったものが、3日155人、5日217人、6日350人、7日406人、9日565人と増えていき、17日の681人でピークに達する。「日々^ひに死人^{しにん}の数^{かず}添^ぞえば」という歌詞は現実であった。

そんな時に「少しぼんとしたぼん助」、つまり少し間抜けな輩¹²に「お先狐」が憑いて、様々な出まかせを言う。江戸時代、狐が憑きやすいのは「児女および男の性昏愚・気怯・狂燥」の者であるという認識があったとされる¹³。周囲の人々はこれは狐憑きに違いないと懸命に加持祈禱を行うとともに、狐を落とそうとして病人を様々に攻め立てた。狐憑き流行の評判に驚いて、町では軒先に八つ手やにんにくをつるし、寄字の守り、みもすそ川の呪い歌、能勢稲荷の黒札を貼るが、それでも疫病は容赦なく人々を襲い、頓死する人は後を絶たない。

ここに出て来る「お先狐」は、金屯道人（仮名垣魯文）著『安政午秋 頃痢流行記』にもその名前が登場する¹⁴。それによると、8月中旬、佃島の者に狐が憑いたため近隣の者たちが修験者に依頼して祈禱させた。すると狐が抜け出して逃げ去ろうとしたので、狐を捕らえて打ち殺し、焼き捨てた辺りに祠を建て、尾崎大明神として祀ったという。

⑥焼場の混雑（4丁表～5丁表）

「へそれおぼえてか死^しときの、其^{その}くるしさ^しに引^ひ替^かて、咽^{のど}をうるほす末^{まつ}期^ごの水^{みづ}も、泡^{あわ}と消^き行^え身^みハ誰^{たれ}も経^き帷^{やう}子^{かた}のかたおもひ、さして行^ゆれぬ事^{こと}なれば、その手^て替^がりも有^{ある}物^{もの}を、死^{しん}で行^ゆ身^みの身^み替^がりハ、よ

もや世界^{かひ}にありやせまい。其^{その}仏^{ほとけ}をバ沢山^{たくさん}そふに^{せん}千も^{せん}二^{つみ}千も^{はや}積^{かねしだい}あげて、早^{ちつと}いをそいも金次第。些も
余計^{よけい}に鳥辺野^{とりべの}の焼場^{やきば}に燃^もゆるほのふの煙^{けふ}り。欲^{よく}に眼^めのなきおん坊^{ぼう}も、臭^{くさ}ひ中^{なか}とて諸^{もろとも}共に、ころりと
死^しすもありとかや。」

死ぬときは「さしで」、つまり誰かと二人連れだって、というわけにはいかず、身代わりになってくれる者もない。焼場には死者の棺桶がたくさん積み上げられ、「おん坊」が焼く順番は金次第である。焼場は煙に満ち、「欲に眼のなきおん坊」も、蔓延する死臭によって「ころり」と死ぬこともあるという。

火葬場の混雑は、江戸町触「布告留」覚書でも確認できる。江戸にいくつかあった火葬場の中でも特に小塚原の混雑が甚だしく、運び込まれた棺桶へ名前と番号を付して積み置き、十日・半月も待ってようやく焼くことができた。しかし夏期で暑いため死骸が腐乱して臭気が下谷・浅草・神田辺りまで押し寄せたという¹⁵。

9月4日の町触では、小塚原の焼場は死体が多くて数日そのまま置かれるために臭気激しく、幕府の医道方から、臭気に触れたものが「疫腐敗熱等之病症」を発することを心配する声上がり、仮埋等の処置を町に求めている¹⁶。

死臭にふれると発病して死亡するという評判は、前掲『疫癘雑話 街迺夢』にも記録される。本書によると浅草の火葬場は「菌傍^{おんぼう}」がおらず、いよいよ焼くのに手間取っているが、それは「日々、百二百の死人を扱うので臭気耐え難く、この悪臭を嗅いで忽ち死ぬ菌傍十三人」という事態に陥ったからだと噂された。しかも多くの「菌傍」が怖がって欠落し、火葬場が一時無人になってしまったという。

『しに行 三日轉愛哀死々』には、「おん坊」がこんな非常時にも無慈悲に金次第で焼く順番を融通しているという認識を記すが、西木浩一の研究によれば、江戸の焼場の料金はほとんど流動的なものでもあったようだ¹⁷。葬式を請け負う寺院に対して焼き場が「引き札」をもって安価に入念に焼くことを宣伝するような、焼場どうしで値段を競う状況が指摘されている。しかも焼き方には等級があって、入り口に値段書を掲示する焼場もあったという。焼場にこのような市場原理が導入されている以上、混雑したときに謝礼次第で順番が変わると人々が考えたのは無理もないだろう。

⑦寺の繁盛（5丁表～6丁表）

「へげにやせ間で死人の数も限りもなき程に、死人の山^{けん}をつく鐘^{しぬひと}と、弔^{かす}ふ法の声^{かぎ}はがり。ことに
数^{すせい}殊^{きこ}に聞^{きこ}えし八、有^{あり}難^{がた}らしき引^{いん}導^{どう}にも、亡^{もう}者^{じや}八^{うか}浮^おまで和^お尚^{せう}がうかむ浮^{うき}世^よなりけり。弔^{とら}ひの会^{のり}会^{こへ}が
しらの行^{ゆき}違^{ちが}ひ、四^し軒^{けん}五^ご軒^{けん}を掛^{かけ}持^{もち}の迎^{むか}ひ僧^{そう}やら葬^{そう}式^{しき}を見^み送^{おく}る人^{ひと}の一日^{ひと}に三^{さん}つ四^しつ五^ごつ重^{かさな}りて、実^{じつ}に
嘸^{はなし}の如^{ごと}くなり。」

世間では死者の数限りなく、寺の鐘をつく音（「死人の山を築く」と「鐘をつく」の意を掛ける）と読経の声が響くばかりである。殊勝ごかしな引導で浮かばれるのは亡者ではなく和尚のほうとはまことに浮世（憂き世）である。葬列が往来で行違い、出棺を迎えに行く役の迎僧は4、5軒掛け持ちで、葬礼を見送る人も一日に3軒、4軒、5軒と重なる。まるで作り話のようだ、とある。

ここではたくさんの葬式で寺が儲けていることを揶揄しているが、安政5年8月、幕府から寺院に向けた触「御府内寺院並火葬地の向きへ申渡」¹⁸は、この揶揄が根拠のない話ではないことを示唆する。

「此節流行暴瀉病にて死亡人不少候処、過分の施物申請、院号・居士等差免、又は葬地の儀に付、地代金等為差出、其上火葬の向は込合候に任せ料物引上げ、或は日間（暇）取候分は死亡人留置候内に入費相掛、施主及難儀候者有之哉に相聞」（以下略、（ ）内筆者）

この触が過大な施物の要求、高額な戒名、墓地の地代金徴収、混雑に便乗した火葬料物引き上げ、焼場で待機する遺体の留置料徴収の禁止を命じているのは、そのような事態が寺社奉行の目に余ったからで、僧侶や「おん坊」に対する揶揄は人々の実感に基くものであったといつてよい。

⑧幕府の医療政策（6丁表～6丁裏）

「へこゝに恵^{めぐみ}のとふときハ、天^{てん}よりふりし芳香散^{ほうかうさん}。其^{その}お薬^{くすり}を吞^{のむ}時^{とき}ハ死^したるものもよみがへる。
君^{きみ}の情^{なさけ}の賜^{たまひ}に目^め出^で度^だ御代^{みよ}とあほぎける。め^めでたき御代^{みよ}ぞあほぎける。

安政五戊午年七月下旬より

地獄^{じごく}の三丁目

さいの河原^か先^{さき}二^に而^を興行^{きやうぎやう}

千死万死

大死^{おほし}叶^は

天から芳香散という特効薬が降ってきて、飲めば「死^し（獅子との掛詞）たるもの」も蘇生するありがたい薬、と礼賛している。実際に8月23日、町奉行所は芳香散というコレラの予防・治療薬の処方に触れた¹⁹。同じ触は天領に向けても出されている。が、江戸では既に7月下旬から多くの犠牲者が始始め、8月半ばをピークに9月初めには終息の動きを見せたことから、あまりに遅い施策であった。健胃・整腸薬である芳香散のコレラへの効果のほども疑わしい。「君^{きみ}の情^{なさけ}の賜^{たまひ}に目^め出^で度^だ御代^{みよ}とあほぎける」と、長唄の常套に倣って最後を寿ぎの言葉で結ぶが、御上の仁政をほめたたえる言葉を装いつつ、実際は幕府の危機管理能力の「お目出たさ」を嘲笑している。

前掲『虎狼利雑話』によると、江戸の町では芳香散の薬剤である益智が品切れになったという。とりあえず幕府お墨付きということで芳香散の薬剤に人は群がり、また姦商の投機^{くわんろく}の対象にもなったのだろう。このころは湿気^{しつせい}払いに蒼朮^{そうじく}をたいたり、狐除けに薫陸^{くんろく}・蕃椒^{ばんけつ}（とうがらし）を焚くことも盛んにおこなわれ、杜松子^{としやうし}や蒼朮も薬店で高騰したことが記されている。

「安政五戊午年七月下旬より地獄の三丁目さいの河原^か先^{さき}二^に而^を興行^{きやうぎやう}」という文言は、コレラが安政5年7月下旬から流行したことに依る。「地獄の一丁目」とは、「のっぴきならない羽目に陥り破滅に向かう第一歩」の意だが²⁰、ここで「三丁目」とするのは、三丁目が江戸浅草猿若町三丁目にあった、歌舞伎の河原崎座の異称だったからだ。河原崎座が「賽の河原^か先^{さき}」になっている。「千死万死」は「千穂万歳」、「大死叶」は「大入叶」のもじりで、いずれも歌舞伎興行などで使われる、興行成功を寿ぐ縁起言葉である。

⑨死者数情報の肥大化（7丁表～7丁裏）

「是迄こがれ幾度か焼直したるこの骨を、てう度三十五日目にて拾ひとらるゝ悲しさ八、ほんに込て余りなおん坊さん、と歎ける亡者のくりことあわれなり。

安政五戊午年七月廿八日より九月十五日迄

御府内中流行病二而死人男女とも

凡拾六万八千七百九十三人

内 諸宗寺方 九万五千三百五十式人葬候よし

内 焼場 七万三千四百四十卷人 火葬のよし

但 一日二積り 四千九百余人」

焼場が混んでいたために、死後35日目によりやく骨上げとなったと、「おん坊」に向かって嘆いている。人の死後35日目は五七日や小練忌と呼ばれた忌日にあたる。

ここに記されている、7月28日から9月15日まで約1か月半の江戸の町（御府内中）における、168,793人という膨大な死者数の典拠は不明である。続く寺方の供養人数95,352人は土葬の数、焼場の73,441人は火葬の数を示す。「一日二積り 四千九百余人」という数値は、これで総人数を割っても約34、5日しかないないので1か月半には足らず、何を示す数値かは不明である。

ちなみに江戸町会所が取り調べた8月一か月間のコレラ犠牲者総数は12,492人である²¹。ただしこれは町奉行管轄である町方の死者に限定され、なおかつ人別帳に記載された町人のみである。江戸全体の居住者は、これ以外に武家人口、寺社奉行管轄の僧侶や神主、町方でも人別帳に記載されない、その日稼ぎの多数の下層民が存在する。

『安政午秋 頃痢流行記』は町奉行発表の町方死者数12,492人に加えて、人別なしの者18,737人の犠牲者数を記す。ただしこの数値の根拠も不明である。近い数値を掲載している史料としては、医師浅田宗伯（1814-94）が栗園陳人の名で書いた『橘黄年譜』（年未詳）が 武家22,554人・町家18,680人、吉野真保編『嘉永明治年間録』（明治2年自序）が武家・寺院・町方・人別に漏れた者併せて「凡三万人程」、幕府洋書調所による『疫毒予防説』（文久2年刊）が28,421人とする²²。

『しに行 三日轉愛哀死々』の数値をはるかに超える情報もある。「諸宗寺院死人書上写」という、表紙を入れてたった4丁の細長い刷物は、7月27日から9月23日まで55日間の死者数について、江戸の各寺院が葬った死者総数268,057人、さらに無人別者として回向院7500人・西念寺4125人、各焼場で扱った死者総計160,119人を追記する²³。しかも、葬礼を10人以下しか扱っていない数多くの寺院を除外していると注記する。さすがにこれは非現実的な死者数に見えてくる。小鹿島果編『日本災異志』（1894年）も本書があげる寺院ごとの死者数の小計および総計を再計算して、いずれも計算が不正確であることを指摘する²⁴。が、そもそも「諸宗寺院死人書上写」は表紙に「売買不禁」という戯言が書かれているところから、真面目な統計資料とみなすべきではないのだろう。当時の読者もこの刷物を正確な数値を求めて購入したとは思われない。戯作の死者数はいわばコレラに対する人々の恐怖心が数値化されたものであって、読者はこの突飛もない数値を自分たちのコレラに対する実感に見合う数として、共感するところがあったのではなかろうか。

高橋敏は、わざわざ町奉行所から死者数に関する触が出たのは、町で大仰な死者数がまことしやかに流れ、人々の不安を煽ったからだろうと推測している²⁵。高橋の調査によると、江戸から

離れた地方の日記類に記された江戸の死者数は膨大で、豆州桑原村の「森年代記」では32万人余、駿州大宮町の「袖日記」では213,000人とある。江戸から離れた地では、「諸宗寺院死人書上写」のような戯作情報が、江戸の現実として伝わって信じられても不思議ではない。

いずれにしても『しに行 三日轉愛哀死々』に掲載された死者数は、当時巷で流布した刷り物や、人々の噂の中で取りざたされた数値の一つとしては突出したものではなく、むしろ読者には、町奉行所発表の死者数よりも自分たちのコロリ体験の感覚に近い数字と受け止められたかもしれない。

おわりに

これまでみてきたように、『しに行 三日轉愛哀死々』が描く状況は、一見誇張された創作世界にも見えるが、いずれも一次史料を含めた他の史料でも確認できる、江戸の人々にとっての安政5年「三日コロリ」の共通経験をベースとする。病人にとりつく狐の跋扈、玉川上水や海への毒投入、鯛の毒、夥しい数の頓死、多種多様なまじないアイテム、そして人の死を金儲けの好機とする寺や焼場。江戸の町の住民にとってはみな既知のことである。

ただしこれらの病の経験は、現実と共同幻想の境界があいまいである。160年後の現代人から見れば明らかにフェイクニュースに見えることがらも、当時の人々にとっては病の経験の一部となっている。コレラ流行下では、実際に自分が経験していることに加え、巨大都市江戸の情報ネットワークの中でもたらされる情報も、共有されて「経験」となっていく。狐憑きの噂が伝われば実際に狐憑きが増えだし、毒混入の噂が広がれば一斉に水道水の利用を控え、自分の知人が魚毒にあたったわけでもなくとも魚を買わなくなる。

ここで、この原稿を書いている2020年9月の状況について思いをめぐらしてみる。いま自分が経験しているコロナという新しい疫病流行下の生活「実態」を客観的に把握することは、現代社会においても極めて困難である。私のコロナ禍の認識と「経験」は、自身のリアルな経験に基づいて形成されているというより、自分が所属する様々なレベルのネットワークとメディアがもたらす情報で形成されているというのが実感である。そのように考えると、くちづてや刷物がもたらすコレラ情報が、後世の私たちからは荒唐無稽な流言飛語に見えるにしても、当時の人々のコレラ経験の一部、もしくは小さくない部分を形成していた状況が腑に落ちる。

安政5年9月のコレラ終息直後に江戸で出版されたコレラ関連戯作は、『しに行 三日轉愛哀死々』だけではない。たとえば本稿であげた『安政午秋 頃痢流行記』は9月、『疫癘雑話 街廻夢』は9月25日、その他に『末代噺語 掃寄草紙』²⁶が10月の板行である。人々はコレラ流行終息後も、流行下の生活の諸相を活写した諧謔に富む出版物を買い求めたことになる。情報によって実際の経験をはるかに越えて多彩になったコレラ経験の全体像は、もはや個人のレベルで総括するのは難しい。諧謔に富んだ戯作は一見単なる娯楽作品に見えるが、江戸の庶民が過酷な疫病経験が何であったのかを自分たちなりに確認し、次の生活に向かって一步を踏み出していく、そのような営みを促す役割も果たしたのではないだろうか。そのように考えていくと、コレラを扱う戯作史料の分析は一次史料の分析同様に、コレラをめぐる生活史研究にとって重要なアプローチの方法と位置付けることができよう。これまで戯作は、疫病史研究の中では傍証史料として部分的に切り取られて使われてきたに過ぎない。一冊の戯作史料が総体として描き出す疫病経験が、

それぞれにいかなるものであったのか、今後ほかの戯作へ対象を広げて分析を重ねていく所存である。

*1 江戸時代のコレラ流行年次については菊池万雄「江戸時代におけるコレラ病の流行―寺院過去帳による実証―」（『人文地理』第30巻第5号、1978年）、野村裕江「江戸時代後期における京・江戸間のコレラ病の伝播」（『地理学報告』第79号、1994年）参照。

*2 漆崎まり「江戸版長唄正本における株板化の動き―中村座を事例として―」（『日本研究』48巻、2013年）。

*3 『新版歌舞伎事典』（平凡社、2011年）「相生獅子」の項より。

*4 「風流相生獅子 解題」（『日本名著全集』第一期「江戸文芸之部」第28巻「歌謡音曲集」、日本名著全集刊行会、1929年）。

*5 『浅草寺日記』第27巻、吉川弘文館、2007年。

*6 柴田光彦・大久保恵子編『瀧澤路女日記』下巻、中央公論社、2013年。

*7 『虎狼利雑話』は『東京市史稿 市街篇』（東京都公文書館蔵、東京大学史料編纂所データベース）より引用。

*8 安政5年7月6日の江戸町触に、7月9日から「小室消毒日蓮之像」が深川浄心寺で開帳される旨の記事が見える（『江戸町触集成』16103）。

*9 たとえば安政5年7月7日「差上申御請書之事」は英吉利人に対して刀剣類・地図類等の販売を禁止し（『江戸町触集成』16109）、同7月8日には棧敷を設けたり高いところに上って英吉利人の参府を見物することを禁じている（『江戸町触集成』16111）。

*10 『疫癘雑話 街廻夢』安政5年9月25日版行、京都大学富士川文庫蔵。

*11 『江戸町触集成』16160。

*12 「ぼんと」は、「ぼんやりとしているさま」を表わす語で、「ぼん助」は「あほう。ばか。」の意（『日本国語大辞典』より）。

*13 人見必大『本朝食鑑』（元禄5年（1692）成稿、同10年刊）に「大抵孤の妖惑する所の者、兒女および男の性昏愚、気怯、狂燥の人也」とある。

*14 金屯道人『安政午秋 頃痢流行記』京都大学富士川文庫蔵。

*15 『江戸町触集成』16160。

*16 『江戸町触集成』16153。

*17 西木浩一「江戸の社会と「葬」をめぐる意識―墓制・盆儀礼・「おんぼう」―」（『関東近世史研究』60号、2006年）。

*18 富士川子長（游）「安政5年虎列刺大流行の事に関する書類」（『中外医事新報』1893年、312号・313号）掲載の塙忠宝（^{ただとみ}1807-62、幕府和学講談所御用掛）の日記抄出より引用。現在の所蔵先は不明。

*19 『江戸町触集成』16140。

*20 『日本国語大辞典』より。

*21 『江戸町触集成』16160。

*22 『橘黄年譜』国会図書館蔵、『嘉永明治年間録』出版人甫喜山景雄（1883年刊）、『疫毒予防説』

東京大学図書館蔵。

*23都立中央図書館所蔵。

*24小鹿島果編『日本災異志』日本鑛業會、1894年。

*25高橋敏『幕末狂乱（オルギー）：コレラがやってきた！』朝日選書、2000年。

*26『末代噺語 掃寄草紙』京都大学富士川文庫蔵。

The experience of the common people in Edo under the cholera epidemic of 1858

– Analysis of the funny Nagauta "Shiniyuki Mikka Korori Aiaishishi –

SUZUKI Noriko

This paper rewrites the entire text of the funny Nagauta "Shiniyuki Mikka Korori Aiaishishi" into modern characters and analyzes it. This book was published in 1858, the year when cholera was prevalent. Until now, historical research on cholera in the Edo period has mainly been based on medical historical materials or local diary historical materials. Therefore, I analyze the literary work of the Edo period, funny Nagauta, as a historical material, and clarify how people at that time experienced the plague, especially from the aspect of their communality.

There are many incidents that people are said to have experienced in common, even for things that seem absurd to modern people. The cholera experience of the people of Edo, including the incidents that seemed to be fake news.